

興來大澤野
讀書為其福
師承為其福
于止
夫

漱石全集
十卷

彼岸過迄

全三十四卷 第八回配本

昭和三十一年九月十二日 第一刷發行◎

漱石全集 第十卷

定價 百五十圓

著 者 夏 目 漱 石

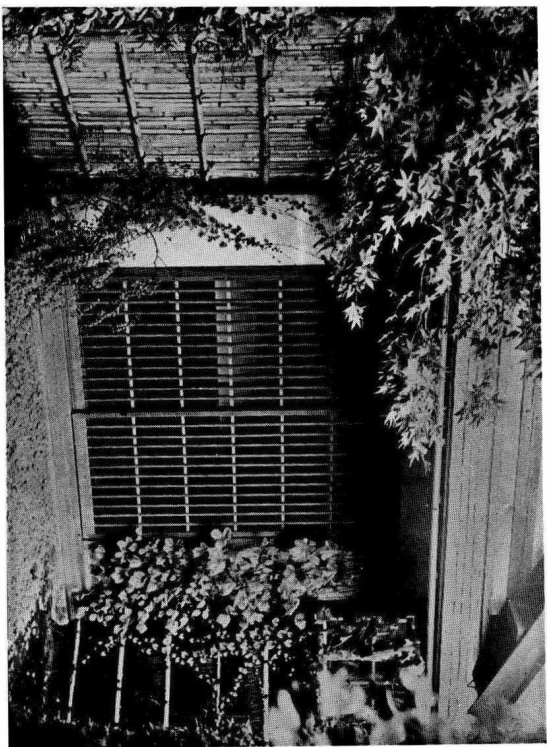


發行 者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地 岩 波 雄 二 郎

印刷 者 東京都青梅市根ヶ布三八五番地 山 田 一 雄

發行 所 東京都千代田區 株式會社 神田一ツ橋三ノ三 岩 波 書 店

落丁本・亂丁本はお取替いたします



早稲田南町の家の玄関

目次

彼岸過迄

彼岸過迄に就て

風呂の後

停留所

報告

雨の降る日

須永の話

松本の話

結末

解説

注解

五

九

吳

二六

一四

一六

二四

二五

二九

二九

彼岸過迄

明治四五、一、二—四五、四、二九

彼岸過迄に就て

事實を讀者の前に告白すると、去年の八月頃既に自分の小説を紙上に連載すべき筈だつたのである。ところが餘り暑い盛りに大患後の身體を打通しに使ふのは何んなものだらうといふ親切な心配をして呉れる人が出て來たので、それを好い機會に、尙二箇月の暇を食ることに取極めて貰つたのが原で、とう／＼其二箇月が過去つた十月にも筆を執らず、十一十二もつい紙上へは杳たる有様で暮して仕舞つた。自分の當然遣るべき仕事、斯ういふ風に、崩れた波の崩れながら傳はつて行くやうな具合で、只だらしなく延びるのは決して心持の好いものではない。

歳の改まる元旦から愈書始める緒口を開くやうに事が極つた時は、長い間抑へられたものが伸びる時の樂よりは、脊中に脊負された義務を片附ける時機が來たといふ意味で先何よりも嬉しかつた。けれども長い間掘り出して置いた此の義務を、何うしたら例よりも手際よく遣つて退けられるだらうかと考へると、又新らしい苦痛を感じずには居られない。

久し振だから成るべく面白いものを書かなければ濟まないといふ氣がいくらかある。それに自分の健康状態やら其の他の事情に對して寛容の精神に充ちた取り扱ひ方をして呉れた社友の好意だの、又自分の書くものを毎日日課のやうにして讀んで呉れる讀者の好意だのに、酬いなくては濟まないといふ心持が大分附け加はつて來る。で、何うかして旨いものが出來るやうにと念じてゐる。けれどもたゞ念力丈では作物の出來榮を左右する譯には何うしたつて行きつこない、いくら

佳いものをもと思つても、思ふやうになるかならないか
自分にさへ豫言の出来かねるのが述作の常であるから、
今度こそは長い間休んだ埋合せをする積であると公言
する勇氣が出ない。そこに一種の苦痛が潜んでゐるの
である。

此の作を公にするに方つて、自分はたゞ以上の事実
を言つて置きたい氣がする。作の性質だの、作物に對
する自己の見識だの主張だのは今述べる必要を認めて
ゐない。實をいふと自分は自然派の作家でもなければ
象徴派の作家でもない。近頃しばしば耳にするネオ
浪漫派の作家では猶更でない。自分は是等の主義を高く
標榜して路傍の人の注意を惹く程に、自分の作物が固
定した色に染附けられてゐるといふ自信を持ち得ぬも
のである。又そんな自信を不必要とするものである。
たゞ自分は自分であるといふ信念を持つてゐる。さう
して自分が自分である以上は、自然派でなからうが、

象徴派でなからうが、乃至ネオの附く浪漫派でなか
らうが全く構はない積である。

自分は又自分の作物を新しいと吹聴する事も好
まない。今の世に無暗に新しがつてゐるものは三越呉
服店とヤンキーと夫から文壇に於ける一部の作家と評
家だらうと自分はとうから考へてゐる。

自分は凡て文壇に濫用される空疎な流行語を藉りて
自分の作物の商標としたくない。たゞ自分らしいもの
が書きたい丈である。手腕が足りなくて自分以下のも
のが出来たり、街氣があつて自分以上を装ふ様なもの
が出来たりして、讀者に濟まない結果を齎すのを恐れ
る丈である。

東京大阪を通じて計算すると、吾朝日新聞の購讀者
は實に何十萬といふ多數に上つてゐる。其の内で自分
の作物を讀んでくれる人は何人あるか知らないが、其
の何人かの大部分は恐らく文壇の裏通りも露路も覗い

た經驗はあるまい。全くだゞの人間として大自然の空氣を眞率に呼吸しつゝ穩當に生息してゐる丈だらうと思ふ。自分は是等の教育ある且尋常なる士人の前にわが作物を公にし得る自分を幸福と信じてゐる。

「彼岸過迄」といふのは元日から始めて、彼岸過迄書く豫定だから單にさう名づけた迄に過ぎない實は空しい標題である。かねてから自分は個々の短篇を重ねた末に、其の個々の短篇が相合して一長篇を構成するやうに仕組んだら、新聞小説として存外面白く讀まれはしないだらうかといふ意見を持してゐた。が、つい夫を試みる機會もなく今日迄過ぎたのであるから、もし自分の手際が許すならば此の「彼岸過迄」をかねての思はく通りに作り上げたいと考へてゐる。けれども小説は建築家の圖面と違つて、いくら下手でも活動と發展を含まない譯に行かないので、たとひ自分が作るとは云ひながら、自分の計畫通りに進行しかねる場合

が能く起つて來るのは、普通の實世間に於て吾々の企てが意外の障害を受けて豫期の如くに纏まらないのと一般である。従つて是はずつと書進んで見ないと一寸分らない全く未來に屬する問題かも知れない。けれどもよし旨く行かなくつても、離れるとも即くとも片の附かない短篇が續く丈の事だらうとは豫想出來る。自分も夫でも差支へなからうと思つてゐる。(明治四十五年一月此作を朝日新聞に公けにしたる時の緒言)

風呂の後

一

敬太郎は夫程驗の見えない此間からの運動と奔走に少し厭氣が注して來た。元々頑丈に出來た身體だから單に馳け歩くといふ勞力だけなら大して苦にもなるまいとは自分でも承知してゐるが、思ふ事が引つ懸つたなり居据つて動かなかつたり、又は引つ懸らうとして手を出す途端にすぼりと外れたりする反間が度重なるに連れて、身體よりも頭の方が段々云ふ事を聞かなくなつて來た。で、今夜は少し癪も手傳つて、飲みたくもない麥酒をわざとボン／＼抜いて、出来るだけ快活な氣分を自分と誘つて見た。けれども何時迄迄経つて

も、殊更に借着をして陽氣がらうとする自覺が退かないので、仕舞に下女を呼んで、其所いらを片付さした。下女は敬太郎の顔を見て、「まあ田川さん」と云つたが、其後から又「本當にまあ」と付け足した。敬太郎は自分の顔を撫でながら、「赤いだらう。こんな好い色を何時迄も電燈に照らして置くのは勿體ないから、もう寐るんだ。序に床を取つて呉れ」と云つて、下女がまだ何か遣り返さうとするのをわざと外して廊下へ出た。さうして便所から歸つて夜具の中に潜り込む時、まあ當分休養する事にするんだと口の内で呟いた。

敬太郎は夜中に二返眼を覺ました。一度は咽喉が渴いたため、一度は夢を見たためであつた。三度目に眼が開いた時は、もう明るくなつてゐた。世の中が動き出してゐるなと氣が付くや否や敬太郎は、休養々々と云つて又眼を眠つて仕舞つた。其次には氣の利かないボン／＼時計の大きな音が無遠慮に耳に響いた。夫か

ら後はいくら苦心しても寐付かれなかつた。已を得ず横になつた儘巻烟草を一本吸つてゐると、半分程に燃えて來た敷島の先が崩れて、白い枕が灰だらけになつた。それでも彼は凝としてゐる積であつたが、仕舞に東窓から射し込む強い日脚に打たれた氣味で、少し頭痛がし出したので、漸く我を折つて起き上つたなり、楊枝を銜へた儘、手拭をぶら下げて湯に行つた。

湯屋の時計はもう十時少し廻つてゐたが、流しの方はからりと片付いて、小桶一つ出てゐない。たゞ浴槽の中に一人横向になつて、硝子越に射し込んでくる日光を眺めながら、香氣さうにぢやぶ／＼遣つてゐるものがある。それが敬太郎と同じ下宿にゐる森本といふ男だつたので、敬太郎はやあ御早うと聲を掛けた。すると、向ふでも、やあ御早うと挨拶をしたが、「何です今頃楊枝なぞを銜へ込んで、冗談ぢやない。さう云やあ昨夕貴方の部屋に電氣が點いて居ない様で

したね」と云つた。

「電氣は宵の口から煌々と點いてゐたさ。僕は貴方と違つて品行方正だから、夜遊びなんか減多にした事はありませんよ」

「全くだ。貴方は堅いからね。羨ましい位堅いんだから」

敬太郎は少し羞痒たいやうな氣がした。相手を見ると依然として横隔膜から下を湯に浸けた儘、まだ飽きずにぢやぶ／＼遣つてゐる。さうして比較的眞面目な顔をしてゐる。敬太郎は此氣樂さうな男の口髭がだらしなく濡れて一本々々下向に垂れた處を眺めながら、「僕の事は何うでも好いが、貴方は何うしたんです。役所は」と聞いた。すると森本は倦怠さうに浴槽の側に兩脇を置いて其上に額を載せながら俯伏になつた儘、「役所は御休みです」と頭痛でもする人のやうに答へた。

「何で」

「何でもないが、僕の方で御休みです」

敬太郎は思はず自分の同類を一人發見したやうな氣がした。夫でつい、「矢つ張り休養ですか」と云ふと、相手も「えゝ休養です」と答へたなり元の通り湯槽の側に突伏してゐた。

二

敬太郎が留桶の前へ腰を卸して、三助に垢擦を掛けさせてゐる時分になつて、森本はやつと烟の出るやうな赤い身體を全く湯の中から露出した。さうして、あゝ好い心持だといふ顔付で、流しの上へべたりと胡坐をかけたと思ふと、

「貴方は好い體格だね」と云つて敬太郎の肉付を賞め出した。

「是で近頃は太分悪くなつた方です」

「どうして／＼夫で悪かつた日にや僕なんざあ」

森本は自分で自分の腹をポン／＼叩いて見せた。其腹は凹んで脊中の方へ引付けられてる様であつた。

「何しろ商賣が商賣だから身體は毀す一方ですよ。

尤も不養生も太分遣りましたがね」と云つた後で、急に思ひ出したやうにアハハ、と笑つた。敬太郎は夫に調子を合せる氣味で、

「今日は僕も閑だから、久し振で又貴方の昔話でも伺ひませうか」と云つた。すると森本は、

「えゝ話しませう」とすぐ乘氣な返事をしたが、活潑なのはたゞ返事丈で、舉動の方は緩慢といふよりも、凡ての筋肉が湯に燂でられた結果、當分作用を中止してゐる姿であつた。

敬太郎が石鹼を塗けた頭を／＼いはしたり、堅い足の裏や指の股を擦つたりする間、森本は依然として胡坐をかけた儘、何處一つ洗ふ氣色は見えなかつた。

最後に瘠ひとまたまりせた一塊の肉團をどぶりと湯の中に抛り込むやうに浸ひけて、敬太郎と略同時に身體を拭きながら上つて來た。さうして、

「たまに朝湯へ來ると綺麗で好い心持ですね」と云つた。

「えゝ。貴方のは洗ふんでなくつて、本當に湯に入いるんだから殊にさうだらう。實用の爲の入湯でなくつて、快感を食たべる爲の入浴なんだから」

「さう六づかしい這入り方でもないんでせうが、何うも斯んな時に身體なんか洗＊ふな億劫＊でね。つい盆鎗＊浸＊つて盆鎗出ちまいますよ。其所へ行くと、貴方は三層倍も勤勉だ。頭から足から何處から何處迄實によく手落なく洗ひますね。御負に楊枝迄使つて。あの綿密な事には僕も殆んど感心しちまつた」

二人は連立つて湯屋の門口かどぐちを出た。森本が一寸通り迄行つて巻紙を買ふからといふので、敬太郎も付合ふ

氣になつて、横丁を東へ切れると、道が急に惡くなつた。昨夕ゆうべの雨が土を潤＊かし抜いた處へ、今朝からの馬や車や人通りで、踏み返したり蹴上げたりした泥の痕あとを、二人は厭いとふやうな輕蔑するやうな様子で歩いた。日は高く上つてゐるが、地面から吸ひ上げられる水蒸氣はいまだに微かすかな波動を地平線の上に描あいてゐるらしい感じがした。

「今朝の景色は寐坊の貴方に見せたい様だつた。何しろ日がかん／＼當つてゐる癖に靄もが一杯なんでせう。電車を此方から透かして見ると、乗客が丸で障子に映る影畫かげえの様に、はつきり一人／＼見分けられるんです。それでゐて御天道様おてんとうさまが向ふ側にあるんだから其一人々々が何れも是もみんな灰色の化物に見えるんで、頗る奇觀でしたよ」

森本は斯んな話をしながら、紙屋へ這入つて巻紙と狀袋で膨ふらました懷ふところを一寸抑えながら出て來た。表に

待つてゐた敬太郎はすぐ今來た道の方へ足を向け直した。二人は其儘一所に下宿へ歸つた。上靴の踵を鳴らして階段を二つ上り切つた時、敬太郎は自分の部屋の障子を手早く開けて、

「さあ何うぞ」と森本を誘つた。森本は、

「もう直午飯でせう」と云つたが、躊躇すると思ひの外、恰も自分の部屋へでも這入るやうな無難作な態度で、敬太郎の後に跟いて來た。さうして、

「貴方の室から見た景色は何時見ても好いね」と自分で窓の障子を開けながら、手摺付の縁板の上へ濡手拭を置いた。

三

敬太郎は此瘠せながら大した病氣にも罹らないで、毎日新橋の停車場へ行く男について、平生から一種の好奇心を有つてゐた。彼はもう三十以上である。夫で

いまだに一人で下宿住居をして停車場へ通勤してゐる。然し停車場で何の係りをして、何んな事務を取扱つてゐるのか、ついぞ當人に聞いた事もなければ、又向ふから話した試もないので、敬太郎には一切がXである。たま／＼人を送つて停車場へ行く場合もあるが、そんな時にはつい混雜に取り紛れて、停車場と森本とを一所に考へる程の餘裕も出ず、さうかと云つて、森本の方から自己の存在を思ひ起させる様に、敬太郎の眼につくべき所へ顔を出す機會も起らなかつた。たゞ長い間同じ下宿に立籠つてゐるといふ緣故だか同情だかが本で、いつの間にか挨拶をしたり世間話をする仲になつた迄である。

だから敬太郎の森本に對する好奇心といふのは、現在の彼にあると云ふよりも、寧ろ過去の彼にあると云つた方が適當かも知れない。敬太郎はいつか森本の口から、彼が歷乎とした一家の主人公であつた時分の話